

令和6年度 矢作川自然再生検討会 議事概要

重要種に係わる情報については、
原則非公開とさせていただきます。

日時：令和7年2月4日（火）13:30～16:00

会場：豊田市職員会館2階 第一会議室

1. 開会

2. 挨拶（豊橋河川事務所 副所長）

3. 議事

(1) 前回意見対応

事務局より説明。（意見等はなし）

(2) 矢作川自然再生検討会規約（改正）

矢作川自然再生検討会規約の改正（裕委員から原田委員への交代等）について事務局より説明し、承認を得た。

(3) 令和6年度モニタリング結果（干潟、ヨシ原）

事務局より説明。委員からの主な意見は以下の通り。

<干潟>

- ・(P18、19)シギ・チドリ類は、矢作川河口部だけでなく地域全体で減少している。その要因として、周囲の水田の減少、海岸部の埋立事業の進行に伴う湿地の減少など、後背地の環境変化によることも大きいことから、干潟だけでは議論できないと考える。
→冬季に水田に水を張る事例もあると聞いている。河川管理者（豊橋河川事務所）で直接対応できるものではないが、流域治水の取り組みとして、各関係機関と情報共有を図っていきたい。（事務局）
→水田の減少や下水処理の整備による栄養塩の減少の影響も大きいように思う。
→三河湾のアサリについては10年近く資源量が減少しており、栄養不足が原因と考えられている。（P14）西三河全体の栄養不足が矢作川河口部にも表れている。
- ・(P11)干潟施工は窪地への土砂投入により行われ、その後の出水で細粒土砂が下流へ流され、地盤高が低下している。ただ、0.2k+160m 測線の左岸から50m付近は、マウンド化しており、航空写真から植物が繁茂していることが想定される。植物が繁茂する場所を鳥類が利用しているようなら、干潟再生の面積を増やす目標とは異なるが、多様な環境を創出したと言えるのではないかと。
- ・(P13)底生動物の令和6年度の定性調査結果について、0.2k+160mにおいて、枠8で確認種数が多くなっている。枠8の位置は左岸の堤防から流心方向に向けて傾斜が緩くなる変化点であり、複数の生物の生息に適した地盤高となっていると考える。5ページに整理された「底生生物と干潟地盤高の関係」とも照らし合わせて考察ができるかもしれない。
- ・(P12)干潟施工箇所での底質調査結果について、0.6k+00m 測線において施工後12年目付近で粒度組成のシルト分の増加、ORP（酸化還元電位）の低下、強熱減量の増加が生じている。干潟施工区は、施工当時は土砂が堆積傾向であったが、近年は浸食傾向にあり、浸食が始まったのが施工後12年目付近であることから、底質と地形の変化のタイミングが一致している。恐らくこの変

化には周期があると考えられ、再度同じような変化が生じると推察される。底質と地形の動態を把握するため、同じような変化が生じるまではモニタリングを続けてほしい。

→河口部の地形の動態は、出水が重要な要因であると考え。意見を踏まえた上でモニタリングを継続したい。(事務局)

- ・(P13、14)底生動物の指標種の確認状況について、アサリと[]を対象に整理されているが、河口域で[]が多く取れていることから、[]を指標種としたらどうだろうか。

→[]についても過去からデータは取得しており整理は可能であるが、モニタリングしている測線の今年度の結果は割合としては多くはない。[]の確認割合が大きく変われば、その要因と併せて整理したい。(事務局)

→河口部について、掘られていた水路が埋まり、塩水遡上が遮られることで塩分濃度が低下し、[]は生息できるがアサリが減少しているという状況と考える。

<ヨシ原>

- ・(P19) 中洲のヨシ原分布状況も確認しているのか。

→施工範囲ほど詳細な調査はしていないが、中洲のヨシ原分布も確認している。(事務局)

→中洲でもヨシ原が分布している場所もあり、オオヨシキリ等も確認されている。大きな出水があると、中洲が増えることで河岸のヨシ原が削られてしまうため管理が難しい。

- ・(P24) R4 ワンド施工区において、地下水は確認されているか。

→満潮時にワンド上流の辺縁部に染み込んだ水は、干潮時にワンドの底から染み出るサイクルを確認しており、染み出る水はワンド内の水温と比べて冷たい。上塚橋上流側のワンドからの伏流水の染み出しも起こっていると考え、非常にゆっくりだと思われる。

- ・ワンド内は本川接続部が閉塞気味である影響で水が溜まりやすいが、干満の差は現れるような状況である。水が溜まりやすいことが、草本や木本の侵入を防ぐ機能を果たし、ヨシ原の定着を促す可能性があり、モニタリングの視点の1つとも考えられる。

→地域イベントとしてヨシ植えを行っているが、冠水頻度が高すぎてヨシが定着しない状況かと考えている。しばらくは継続的にモニタリングを続けてみたい。(事務局)

(3) 矢作川自然再生計画【河口部再生編】見直し

事務局より矢作川自然再生計画の見直しについて説明し、事業の延伸等の矢作川自然再生計画書更新について承認を得た。

(4) 自然再生計画の現状と今後の対応方針

- ・自然再生事業が10年延伸され、うれしく思う。生物の確認個体数等について、年ごとの変動はあるようだが、土砂管理も含め自然の営力も活用して干潟、ヨシ原の回復を進めてほしい。

- ・(P16)ヨシ原面積について、矢作川河口部におけるヨシ原分布の変遷の図に示されたヨシ群落の範囲を集計していると考え、この図は5kまでの範囲しか表示がない。これより上流側のヨシ面積も集計対象としているのか。また、干潟再生の議論でもあったとおり、砂州の前進により徐々に中洲面積が増えていることから、中洲に分布するヨシ原も増えていると考えられるが、中洲のヨシ原面積も集計対象としているのか気になる。干潟と同様だが、地形や植生の動態を把握した上で、どれほど手を加えるかを考えるべきである。

→ヨシ原面積は9kより下流を集計している。ヨシ原面積については即答ができないが、平成5年以降は水国調査が行われ、群落ごとのデータがあるので、反映している可能性もある。集計状況について再確認する。今後の自然再生は地形変化等も考慮し、検討を進めたい。(事務局)

- ・河岸側のヨシ原が浸食を受けるのは、中洲の影響もある。中洲が大きくなる前に堆積を予防するなど、滞筋、中洲の管理を行うのが良いように思う。

→河道管理の視点で、低水路の切り下げ方はこれまで議論してきており、令和4年度のワンド施工区は、令和5年6月出水でも形状が概ね維持できることが証明された。望まれる姿としては、低々水路により維持管理的にコントロールし、中洲が発達しないように考えるべきに思う。さらには治水と自然再生は、コミュニケーションを取りながら進めていくべきである。

→治水、土砂管理、自然再生等、コミュニケーションを取りながら進めていけるよう、引き続きご助言などいただきたい。(事務局)

4. その他

令和7年度ヨシ植え体験会開催の予定について事務局より説明した。

5. 閉会

以 上